

【追悼文】

故粕谷慶治教授を偲んで ——学問研究と活動——

大学院経済学研究科委員長 亀 山 潔

粕谷慶治教授は去る平成 15（2003）年 11 月 19 日朝、急性虚血性心疾患でこの世を去られた。享年 70 歳であった。4 か月後には停年を迎えられるはずであった。ご家族の話によると、前日は元気で買物に出かけられたという。筆者は訃報を聞いて、わが耳を疑った。葬儀時の弔辞で「粕谷先生！どうしてそんなに急いで旅立たれるのですか。大学院でも学部でも学生が待っているのですよ！」と呼びかけずにはいられなかった。

故粕谷教授と私との交友関係は、この大学という場だけで 30 年以上にわたる。そこで、公私双方の立場から故人を偲ぶことにする。

1. 若き研究者

粕谷氏は昭和 8（1933）年 4 月 30 日、東京都杉並区和田に生を受けた。第 2 次大戦中の一時期を除いて、この地で育ち成長された。筆者は故人からよく戦前または終戦直後の様子を聞いていた。昭和 21（1946）年、旧制の中学校、豊玉中学校に入学するが、学制改革で現行の中学校（当時は新制中学校と言った）に移行された。そして東京都立豊玉高校に入学。同校を卒業して、早稲田大学商学部に進学した。昭和 36（1961）年大学卒業と同時に、当時景気のよかった函館ドック株式会社に入社した。しかし、研究を思い立ち同社を退職し、昭和 39（1964）年早稲田大学大学院商学研究科修士課程（「世界経済論」専修）に進学する。修士論文は「マルクス恐慌論の研究」と題するものであった。商

学研究科とはいえ、当時はマルクス経済学の影響が実に大きかったことを物語る。粕谷氏は引き続き博士課程に入学し、「信用と恐慌」、「戦後世界経済における循環恐慌」などの研究を行ない、論文が公表されている（『商経論集』第17,18号、昭和45年）。ここに、「若き粕谷慶治」の一面を見ることができる。

しかし、粕谷氏の関心は次第に現実の経済問題に移り、当時最も華やかに論じられていた国際通貨基金（IMF）の問題を研究した。この時期が昭和47（1972）年で、粕谷氏が博士課程3年を終えた年に当る。同年4月1日付で国士舘大学政経学部（一部）の非常勤講師、翌年から専任講師に就任する。昭和51（1976）年には助教授、昭和56（1981）年に教授に昇格する。

教授昇格のころの粕谷氏は、さらに現実的な経済問題に研究の対象を移行させている。「スタグフレーションと管理された貿易」と題する論文が『関税と貿易』（1981.5）に掲載されている。この時期より少し前から、インフレーションが進行しつつ同時に不景気であるという、かつてなかった現象（スタグフレーション）で日本経済は悩まされていた。粕谷氏は敏感にこの現実問題をとらえ、貿易の実態との関連で論じた。この論文の構想は、『講座国際経済』（共著、世界書院、昭和56年）の一部として掲載されている（同書第2章「Vスタグフレーション」）。

このころの論調は、粕谷氏の大学院在学中の関心から、それがどのように現実経済に適用できるかという側面に関心が移っていたように思われる。粕谷氏は、戦後の世界経済発展の共通要因として「技術革新」をあげ、当時よく問題にされていた「産業構造の変化」の問題を取り上げ、資本主義の構造的矛盾を明らかにすることが意図されている。

以上がほぼ大学院在学中から、教授昇格のころ、つまり1980年ごろの「粕谷慶治の研究とその傾向」ということになる。このような視点で観察すると、その研究内容または研究対象から、現実の社会経済の、あるいは世の中の変化を知ることができる。まさに1970～80年における「粕谷慶治研究」ともいえる。

2. さまざまな活動と叙勲

粕谷氏は、国士舘大学政経学部では「貿易論」と「経済体制論」を、大学院経済学研究科では「貿易論研究」（修士課程・博士課程）を担当した。そして平成8（1996）年から経済学研究科委員長、平成10（1998）年に国士舘大学副学長、翌年6月1日付で学校法人国士舘の常任理事および評議員に就任する。彼は非常に誠実で、かつ責任感・正義感の強いキャラクターの持ち主であった。理事・評議員という多忙な身になっても、とくに大学院生に対する指導には誠意をつくした。また、中国人留学生にも熱心で、ついに博士請求論文の完成まで親切に指導し、平成14（2002）年3月、同学生に「博士（経済学）」の学位を取得させた。そのころの粕谷氏は大変疲れたように見え、筆者はたびたび「大丈夫ですか、体調が悪いのでは」などの声をかけていたほどであった。

粕谷氏は、大学外における学会等の活動も顕著であった。貿易学会理事，アジア市場経学会理事，日本経済政策学会理事を長年勤められ，学問の発展に寄与している。そのほかに異色な活動がある。心身障害者の福祉施設「社団法人やどかりの里」の理事を，昭和52（1977）年から何と26年間にわたり勤めた。この活動はまさにボランティア活動で，多くの関係者から感謝されているだけでなく，尊敬されていると聞く。粕谷氏の誠実で温い人間性をよくあらわしている事実であると，筆者は感じないわけにはいかない。

以上のとおり，粕谷氏の経歴と功績は実に大きなものである。この事実は叙勲に値いするとして，法人側から文部科学大臣あてに「死亡叙位・叙勲」の申請を行なった（平成15年12月2日）。結果は明らかである。粕谷慶治氏は「従五位瑞宝小綬章」に叙せられた（「功績調書」については，遺族の許可を得て本稿末尾に掲示する）。

3. 学問研究の展開

再び研究について。粕谷氏の長い研究歴の中で、平成に入ってからの研究を取り上げる。平成2（1990）年「貿易における保護と管理について」と題する論文が『日本貿易学会年報』（第27号）に掲載されている。この論文は、まさに現実の経済問題を取り上げている。小麦の国際取引における過去20年間の趨勢を統計的・数量的に分析し、それに基づいてアメリカの小麦を中心に、連邦政府の農業政策を考察し、「農産物貿易促進援助法」を根拠に特定政府の計画による輸出および国内農産物の価格政策など、農産物保護制度は結局市場原理を否定することになることを明らかにしている。つまり、今日における保護主義に対する批判なのである。これと同じことが、日本政府による極端な米作への介入（米作保護を目的とした減反制度）についてもいえると主張し、詳論されている。このような熱っぽい論旨は、同じ延長線上ではないけれど、「若き粕谷慶治」の研究姿勢がここに生かされていると、本稿の筆者には感じられる。

平成5（1993）年、韓国貿易学会主催の国際学術大会が開催された。粕谷氏は同大会で研究報告を行なっている。「東アジア経済と南北朝鮮の貿易の正常化について」と題するものである。東アジア経済に占める韓国と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）とを総合した経済力の比重と役割を、貿易を中心に論じたものである。ここで粕谷氏は、政府の役割あるいはその指導性の意味を論じ、底流では南北朝鮮統合の可能性を探ろうとしていると、本稿の筆者には思える。深読みのしすぎであろうか。この研究報告は、論文として『国際学術大会論文集』（韓国貿易学会発行、1993）に収められている。

これをさらに発展させたのが、「外国貿易の発展と政府の役割——日韓を中心として——」と題するものである。これは韓国貿易学会主催の学術発表会で報告されたもので、『学術発表会論文集』（1996. 6）に収録されている。この論題からも明らかなおとおり、粕谷氏は「政府の役割」つまり政府の政策に関心

をもつようになり、日本経済政策学会にも積極的に関与するようになった（平成 13 年に同学会の理事に就任）。

* * *

〔追記〕

以上で筆を置いたが、これだけでは「粕谷慶治の人間像」の一部でしかない。葬儀時の弔辞で、筆者は「今日の国士舘大学は粕谷先生抜きには考えられない」という趣旨のことを申し述べた。その理由はこうである。

昭和 48（1973）年 12 月に教員組合が結成された。その 3 年 6 か月後の昭和 52（1977）年 7 月から、粕谷氏はその委員長になり、学園の民主化と改革に取り組んだ。そして、大問題が解決したのが、昭和 59（1984）年であった。粕谷氏はこの 7 期 7 年間に委員長として活動された。そのために想像を絶するエネルギーと時間を費やした。そして、上記の研究やその他の活動を成し遂げられた。まさに超人的活動というほかはない。この 7 年間に支えたものは、まさに粕谷氏の「正義感」と「責任感」という人間性にあったと、筆者は考えている。

功 績 調 書

かす や けい じ
粕 谷 慶 治

同人は、昭和 8 年 4 月 30 日東京都に生れ、昭和 36 年 3 月 31 日早稲田大学第一商学部を卒業し、造船会社に入社した。だが、昭和 39 年 4 月 1 日早稲田大学大学院商学研究科修士課程に入学し、昭和 47 年 3 月 31 日、同博士課程を修了した。同年 4 月に国士舘大学政経学部非常勤講師、翌年 4 月から専任講師に、昭和 51 年 4 月同助教授、昭和 56 年 4 月同教授に昇格した。平成 8 年 4 月から同 10 年 4 月まで同大学院経済学研究科委員長、同 10 年 4

月から同大学副学長、翌年6月1日から同15年5月27日まで学校法人国士館の常任理事（教授職と併任）の任に当たった。

この間、同人は国際貿易に関する研究を深め、国士館大学においては言うにおよばず、専修大学その他の大学において「貿易論」を、国士館大学大学院経済学研究科においては「貿易論研究」の講義と演習を担当し、学生に対する教育には熱心に取り組んだ。また、同人は、日本貿易学会の理事、日本経済政策学会の理事の任に当たり、その他数々の学会において顕著なる活動を行うなど、学術の向上と学会の発展に著しい功績をあげた。

同人は特に研究面において、国際貿易の理論と政策を究め、その応用分野として主にアジア地域の経済実態分析と政策論を追求し、この分野における学問的水準の向上に功績が認められる。これを示す著書・論文等をすべて掲示できないが、『国際貿易の理論政策実務』（昭和55年、世界書院）『国際貿易論』（平成2年、学文社）などの著作があげられる。また、近年の論文としては、「外国貿易における競争と秩序の国際関係」（平成8年3月「日本貿易学会年報」第330号）、「外国貿易の発展と政府の役割——日韓を中心として——」（平成11年6月、「韓国貿易学会学術発表会論文集」）などがあげられる。

また、国際友好の一助として、同人は特に留学生の指導に多大な功績を納めている。たとえば、留学生の博士論文作成に対して熱心な指導を行い、平成14年3月に同留学生が「博士（経済学）」の学位を得させるにいたるなどの功績があった。

他方、同人はボランティアとして、心身障害者の福祉施設「社団法人やどかりの里」の理事を昭和52年から26年間にわたり勤めるなど、社会福祉の面についても大きな功績を残した。これは、学問研究・教育とは別に著しく優れた社会貢献の一つとしてあげることができる。

以上のように、同人は学問の研究、学生に対する教育指導、大学の管理運営、国際的友好活動、社会福祉など、その功績はまことに顕著であると認められる。

(粕谷慶治) 著書論文一覧

| 著書（論文）名 | 発行所 | 発行年 | 備考 |
|---------------------------------------|-------------------|----------|----|
| マルクス恐慌論の研究 | 修士学位論文 | 昭 41, 3 | |
| 信用と恐慌 | 商経論集第 17 号 | 昭 45, 2 | |
| 経済発展と資本蓄積 | 商経論集第 18 号 | 昭 45, 7 | |
| 戦後世界経済における循環と恐慌 | 商経論集第 19 号 | 昭 45, 12 | |
| 特別引出権について | 世界市場問題研究第 4 号 | 昭 46, 10 | |
| 国際通貨制度と金本位制度 | 商経論集第 21 号 | 昭 47, 2 | |
| 経済学 | (株) 文真堂 | 昭 48, 5 | |
| 世界経済体制論 | (株) 文真堂 | 昭 48, 12 | 共著 |
| アンデス共同市場と外国貿易 | 政経論叢第 21 号 | 昭 49, 11 | |
| 1929 年恐慌と外国貿易 | 日本貿易学会年報第 12 号 | 昭 50, 2 | |
| 経済学入門 | (株) 文真堂 | 昭 50, 5 | 共著 |
| 外交貿易の必然性について | 政経論叢第 23 号 | 昭 50, 11 | |
| ペルーの経済開発計画 | アジア経済研究所・研究誌 | 昭 51, 6 | |
| 世界市場について | 政経論叢第 26 号 | 昭 52, 9 | |
| 転換期の国際経済論 | (株) 自由書房 | 昭 52, 10 | 共著 |
| 世界貿易と技術の発展 | 日本貿易学会年報第 15 号 | 昭 53, 2 | |
| “経済は生きている” | (株) 文真堂 | 昭 53, 4 | 共訳 |
| 世界経済の循環と産業構造 | 関税と貿易 1978, 12 月号 | 昭 53, 12 | |
| 国際貿易の理論政策実務 | (株) 世界書院 | 昭 55, 12 | 共著 |
| スタグフレーションと管理された貿易 | 関税と貿易 1981, 5 月号 | 昭 56, 5 | |
| 講座「国際経済」 | (株) 中央経済社 | 昭 57, 6 | 共著 |
| “経済は生きている” | (株) 文真堂 | 昭 53, 4 | 共訳 |
| on the trend of the world wheat trade | 政経論叢第 56 号 | 昭 61, 6 | |
| 世界小麦貿易の趨勢について | 日本貿易学会年報第 24 号 | 昭 62, 3 | |
| 貿易における保護と管理について | 日本貿易学会年報第 27 号 | 平 2, 3 | |
| 国際貿易論 | (株) 学文社 | 平 2, 4 | 共著 |
| 外国貿易における競争と秩序の国際関係 | 日本貿易学会年報 | 平 8, 3 | |
| 外国貿易の発展と政府の役割 一日韓を中心として一 | 韓国貿易学会学術発表会論文集 | 平 11, 6 | |

以上